# ゼミノート #4

# Deformation Theory

## 七条彰紀

### 2018年8月1日

## 1 Automorphism Group of Stable Curve

[5] 3.A, [7] §1 を参照する.

C,D:: stable curves of genus g over a scheme S の間の isomorphism group の scheme としての構造を与える。この scheme を  $\mathrm{Isom}(C,D)$  と書く。そして  $\mathrm{Aut}(C)=\mathrm{Isom}(C,C)$  と定義し,これの scheme としての特徴を調べる。

Isom(C, D) の特徴付けをするため、次の関手を考える.

$$\mathcal{I}som_S(C,D): \quad \text{(Scheme over } \mathbb{C}) \quad \to \qquad \qquad \text{(Set)}$$
 
$$S' \qquad \qquad \mapsto \quad \{ \ C \times_{\mathbb{C}} S' \to D \times_{\mathbb{C}} S' \ :: \ S'\text{-isomorphism} \}$$

 $\iota\in \mathit{Isom}(C,D)(S')$  から得られる  $\iota^*$  は  $\omega_{C\times S'/S'}^\circ=\iota^*(\omega_{D\times S'/S'}^\circ)$  を満たす。また  $\otimes$  と交換する(すなわち Picard 群の間の準同型である。[3] Ex II.6.8)。このことから  $\mathrm{Isom}(C,D)$  が適当な r をとると PGL(r+1) の部分群として書けることが分かる。

もう少し詳しく  $\operatorname{Isom}(C,D)$  を書く.  $n \geq 3$  を整数とする. 次のように r,d をとる.

$$r+1=h^0((\omega_{C/\mathbb{C}}^\circ)^{\otimes n})=(2n-1)(g-1), \qquad d=\deg(\omega_{C/\mathbb{C}}^\circ)^{\otimes n}=2n(g-1).$$

すると [3] II.7 より,C,D は  $\mathbb{P}^r_{\mathbb{C}}$  の次数 d,arithmetic genus g の closed curve とみなせる( $\mathbb{P}^r$  に埋め込める). なので Hildert scheme ::  $\mathcal{H}=\mathcal{H}_{d,g,r}$  の点として扱うことが出来る.ここで次のように射を定める.

$$\mu: \quad PGL(r+1) \quad \to \quad \mathcal{H} \times \mathcal{H}$$

$$\alpha \qquad \mapsto \quad (\alpha \cdot [C], [D])$$

すると、 $\mathcal{I}som(C,D)$  は  $\mu^{-1}(\Delta)$  によって表現される $^{\dagger 1}$ . これを group scheme over  $\mathbb{C}$  ::  $\mathrm{Isom}(C,D)$  とする. scheme over  $\mathbb{C}$  :: X について少々一般の理論を述べる。 $\mathbb{I} = \mathrm{Spec}\,\mathbb{C}[\epsilon]/(\epsilon^2)$  とおく (ref. [5] 1). [3] Ex II.2.8 より、 $t \in \underline{X}(\mathbb{I})$  は X の  $\mathbb{C}$ -rational point :: x と  $T_x(X) = \mathfrak{m}_x/\mathfrak{m}_x^2 = \mathcal{T}_x$  の元に対応する。ここで  $\mathcal{T}$  は tangent sheaf ::  $\mathcal{T} = \mathcal{H}om_{\mathcal{O}_X}(\Omega_X, \mathcal{O}_X)$  のことである。[5] でいう regular vector field とは  $\mathcal{T}$  の section のこと (と思われる)。

$$\Delta \cap \operatorname{im} \mu = \{ (\alpha \cdot [C], [D]) \mid \alpha \cdot [C] = [D] \}$$

の PGL(r+1) への逆像なので、この点と C,D の間の同型と対応することが分かるだろう.

#### 定理 1.1

C:: stable curve of genus q > 2 について,

$$\operatorname{Ext}^{0}(\Omega_{C}, \mathcal{O}_{C}) = H^{0}(C, \mathcal{T}_{C}) = \mathcal{T}_{C}(C) = 0.$$

(証明). [7] §1.

 $\pi: \tilde{C} \to C$  を normalization of C とする. また  $\tilde{C}$  の connected component の個数を  $\nu$ , それぞれの genus を  $g_i$   $(i=1,\ldots,\nu)$  とする.

今,  $D \in \mathcal{T}_C(C)$  は pullback ::  $\pi^* : \mathcal{T}_{\tilde{C}} \to \pi^* \mathcal{T}_C$  によって $^{\dagger 2}$ .  $\tilde{D} \in \mathcal{T}_{\tilde{C}}(\tilde{C})$  C の double point に  $\pi$  で対応 する点 (point laying over double point, plodp) で 0 になるような regular vector field ::  $\tilde{D} \in \mathcal{T}_{\tilde{C}}(\tilde{C})$  に対応する (TODO). このような  $\tilde{D}$  は 0 しかないことを確かめれば,  $\mathcal{T}_C(C) = 0$  がわかる.

#### 主張 1.2

1点 $P \in \tilde{C}$ で $\tilde{D}_P = 0$ ならば, $\tilde{D} = 0$ である.

(証明). C :: reduced connected scheme に注意する.  $P \in C$  において  $\tilde{D} \in \mathcal{T}_C(C)$  が  $\tilde{D}_P = 0$  を満たすとしよう. C の irreducible affine open cover ::  $\mathfrak U$  をとり, $P \in U$  なる  $U = \operatorname{Spec} A \in \mathfrak U$  をとって固定する. すると C :: reduced より A :: integral domain.  $\tilde{D}|_U \in \mathcal{T}_C(U)$  が  $P \in U$  で 0 になるのだから,次が成立する.

$$\exists u \in A - \mathfrak{p}_P, \quad u \cdot (\tilde{D}|_U) = 0.$$

A:: integral より、これは  $\tilde{D}|_U=0$  を意味する。U と交わる irreducible affine open subset of C::  $V\in\mathfrak{U}$  についても、 $\tilde{D}|_{U\cap V}=0$  なので  $\tilde{D}|_V=0$ . C:: connected なので、このように V を取り続けることで、全ての  $V\in\mathfrak{U}$  について  $\tilde{D}|_V=0$  であることがわかる。sheaf の Identity Axiom から、C 全体で t=0.

したがって我々は  $\tilde{C}$  の各 component は少なくとも一つずつ plodp をもつこと示せば良い.

 $\mathcal{T}_{\tilde{C}} = \mathcal{H}om(\Omega_{\tilde{C}/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_{\tilde{C}})$  なので、 $\mathcal{T}_{\tilde{C}}$  に対応する divisor は  $K_{\tilde{C}}$ .  $\deg K_{\tilde{C}} = 2\tilde{g} - 2$  なので、 $\tilde{g} > 1$  ならば  $\deg(-K_{\tilde{C}}) < 0$ . したがって [3] Lemma IV.1.2 から  $\dim_{\mathbb{C}} H^0(\tilde{C}, \mathcal{T}_{\tilde{C}}) = 0$ . すなわち  $\mathcal{T}_{\tilde{C}}(\tilde{C}) = 0$ . なので以下では  $\tilde{g}_i = 0, 1$  とする.

 $\tilde{g}_i=0,1$  であるとき, $\tilde{C}$  の各 connected component は必ず plodp をもつ.実際,genus formula で  $\delta=0$  とすると

$$g = \sum_{i} (\tilde{g}_i - 1) + 1 \ge 2$$

したがって  $\sum_i (\tilde{g}_i-1)>0$  ということになる.しかし仮定から  $\tilde{g}_i-1\leq 0$  なので, $\delta>0$ . すなわち C は必ず node をもつ. $\tilde{C}$  の各 component は smooth であることと C が connected であることも踏まえて考えると, $\tilde{C}$  の各 component は少なくとも一つずつ plodp をもつことが分かる.(この辺りは [7] Lemma1.4 で詳しく述べられている).

別証明として [4] Prop27.4 がある.

### 命題 1.3

任意の閉点  $P \in Aut(C)$  について、 $\mathcal{O}_{Aut(C),P} \cong \mathbb{C}$ . 特に Aut(C) :: reduced scheme.

 $<sup>^{\</sup>dagger 2}$  R :: ring, A,B :: ring over R とする. 一般に、k-homomorphism ::  $\phi:A\to B$  があるとき、 $D\in \mathrm{Der}_R(B)$  は  $\phi^*:D\mapsto D\circ\phi$  によって  $\mathrm{Der}_R(A)$  个写すことが出来る.

(証明).  $X = \operatorname{Aut}(C)$  は group scheme over  $\mathbb C$  であるから,X のある点での local な性質は transition を用いて単位元 e での性質と言い換えられる.なので  $A := \mathcal O_{X,e}$  のみを考える.X :: group scheme over  $\mathbb C$  より  $e :: \mathbb C$ -rational point なので,A が体ならばそれは  $\mathbb C (= A/\mathfrak m_A)$  と同型である.よって我々は A が体であることのみ示せば良い.

上記の定理 (1.1) から, $\mathcal{T}_C(C)=0$ . これは  $C\times\mathbb{I}$  の  $\mathbb{I}$ -automorphism は自明なものしか無いことを意味する(後述). さらに  $\mathrm{Aut}(C)$  の定義から,これは射  $\mathbb{I}\to\mathrm{Aut}(C)$  としては自明なものしか存在しないことを意味する. さらに [3] Ex II.2.8 より,これは  $\mathfrak{m}_A/\mathfrak{m}_A^2=0$  を意味する.中山の補題から  $\mathfrak{m}_A=0$ . よって A は体である.

# 2 Definitions of Deformations and (Uni-)Versal Deformation.

定義 **2.1** (C-pointed scheme [8] §1.2.1)

scheme :: Y と  $\mathbb{C}$ -rational point ::  $y_0 \in Y$  の組を  $\mathbb{C}$ -pointed scheme を呼び, $(Y, y_0)$  と書く.

morphism of  $\mathbb{C}$ -pointed schemes ::  $(S, s_0) \to (T, t_0)$  とは、moephism of schemes ::  $\phi: S \to T$  であって、 $\phi(s_0) = t_0$  を満たすもののこと.

定義 **2.2** (Deformation of Scheme [8] §1.2.1, [5] §3.B) (i) deformation of X とは、以下のような pullback diagram のことである.  $\psi$  から  $X \cong \mathcal{X} \times_Y \mathbb{C}$  が誘導される.

$$X \longrightarrow \mathcal{X}$$

$$\xi : \begin{cases} \text{p.b.} & \text{flat, surj.} \\ \mathbb{C} \xrightarrow{s} Y \end{cases}$$

A':: local artinian ring with  $A'/\operatorname{Nil}(A')\cong\mathbb{C}$  を用いて  $Y=\operatorname{Spec} A'$  と書ける場合, これは abstruct lifting of X to A' とも呼ばれる ([9] 4.2).

- (ii) 上の deformation of X ::  $\xi$  について、S のことを  $\xi$  の parameter space、X を  $\xi$  の total space と呼ぶ.
- (iii) 任意の scheme :: X と  $\mathbb{C}$ -pointed scheme ::  $(S, s_0)$  に対して、S が parameter space であるような deformation of X が存在する:

$$X \longrightarrow X \times_{\mathbb{C}} S$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

$$\mathbb{C} \longrightarrow S$$

これを product family または trivial family と呼ぶ.

(iv) morphism of  $\mathbb{C}$ -pointed schemes ::  $(T, t_0) \to (S, s_0)$  は,parameter space が S である deformation ::  $\xi$  から base change によって次の deformation を誘導する.

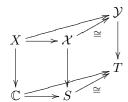
$$X \longrightarrow \mathcal{X} \times_S T$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow$$

$$\mathbb{C} \longrightarrow T$$

これを元の deformation の  $f:(T,t_0)\to (S,s_0)$  による pullback と呼び、 $f^*\xi$  と書く(このノート独自?).

(v) isomorphism of deformations of X ::  $\xi \to \eta$  とは、以下の可換図式が成立する同型  $\mathcal{X} \cong \mathcal{Y}, S \cong T$  のこと.



isomorphism of parameter spaces ::  $(S, s_0) \to (T, t_0)$  と deformation から誘導される deformation は元の deformation と同型である.

## 定義 2.3 (Universal Deformation, [5] 3.B, [4] §15)

universal deformation for X とは,次の性質を満たす deformation of X ::  $\xi$  (parameter space :: S): 任意 の deformation of X :: $\eta$  (parameter space :: T) にたいし,morphism of pointed schemes ::  $f:T\to S$  が 一意に存在し, $f^*\xi\cong\eta$  となる.

Universal Deformation は、次の関手の表現対象であると言える.

$$\mathbf{Sch}/\mathbb{C} \ni S \mapsto \{ \text{Deformation of } X \}.$$

したがって全ての Deformation は universal deformation から得られる. しかし、当然ながらというべきか, universal deformation は殆どの場合で存在しない. そこで universal deformation への要求を

- $S' \to S$  & locally about S' にとるものとし,
- $\bullet$   $U \rightarrow S$  の一意性は要求しない

と弱める. 一意 (uni-) ではないので、これを versal deformation と呼ぶ.

### 定義 2.4 (Versal Deformation)

(versal deformation の定式化が見つからないので保留. 見つけた限りでは versal deformation for scheme は次で意義する formal deformation でのみ定義されている. [1] では versal deformation for (complex) manifold が定義されているのみである.)

## 定義 2.5 (First Order Deformation)

 $D = \mathbb{C}[x]/(x^2), \epsilon = x \mod (x^2)$  とする.  $\mathbb{I} = \operatorname{Spec} D$  の唯一の閉点を 0 で表す.  $(\mathbb{I}, 0)$  上の deformation  $\epsilon$ , first order deformation (or infinitesimal deformation) と呼ぶ.

### 注意 2.6

X:: stable curve of genus g とする. first order deformation ::  $\mathcal{X} \to \mathbb{I}$  は、moduli space の定義から、 $0 \in \mathbb{I}$  を  $[X] = [\mathcal{X}_0] \in \overline{\mathcal{M}}_g$  へ写す  $\mathbb{I} \to \overline{\mathcal{M}}_g$  に対応する.そしてこの射は、既に知られている通り Zariski tangent space at [X]::  $T_{[X]}$  の元に対応する.よって X の first order deformation から  $T_{[X]}$  の元への対応がある.この対応は一対一であろうか?

### 補題 2.7

次の first order deformation of X を考える.

$$X \xrightarrow{\psi} \mathcal{X}$$

$$\downarrow \quad \text{p.b.} \quad \downarrow$$

$$\mathbb{C} \xrightarrow{0} \mathbb{I}$$

この時,  $\psi$  は closed imm. かつ同相写像である.

(証明). まず  $\mathbb{C} \to \mathbb{I}$  が closed imm. であり、closed imm. が stable under base extension であることから、 $\psi$  も closed imm. また closed imm. ならば finite である ([3] Ex II.5.5b).  $\psi$  が homeomorphism であることは local on codomain(target) なもの<sup>†3</sup>なので、 $\mathcal{X}$  :: affine と仮定して証明すれば十分.

以上から、 $\mathcal{X}=\operatorname{Spec} A, X=\operatorname{Spec} R, R::$  A-algebra, finitely generated as module と仮定して良い、また、 $\psi::$  closed imm. であるから、 $A\cong R/I$  なる I:: ideal of R が存在する。また仮定から  $A\otimes_D\mathbb{C}\cong R$  かっ A:: flat D-module. そこで以下の D-module 完全列に  $\otimes_D R$  とする。

$$0 \longrightarrow \epsilon D \longrightarrow \mathbb{C} \longrightarrow 0$$

すると次のように成る.

よって  $(\epsilon D) \otimes_D R$  同様 I は nilpotent ideal (i.e. $I^2 = 0$ ).

 $X = \operatorname{Spec} R$  の閉集合として

$$\mathcal{X} = \text{Spec } A = V(I) = V(I^2) = V((0)) = X$$

なので im  $\psi = \mathcal{X}$ .  $\psi$ :: closed imm. なので, これで  $\psi$ :: homeo が証明できた.

### 定義 2.8 (Restriction of First Order Deformation)

上の命題にある first order deformation of X について, U :: open subset of X をとる. locally ringed space ::  $(\psi(U), \mathcal{O}_X|_{\psi(U)})$  を  $\mathcal{X}|_U$  と書く.

## 3 First Order Deformation of a Nonsingular Variety.

## 補題 3.1

 $A :: \operatorname{ring}, X = \operatorname{Spec} A$  とする. この時, first order deformation of  $X :: \mathcal{X}$  も affine scheme である.

(証明). [3] Ex II.3.1 への回答でもある.

 $\mathcal{I} = \ker(X \hookrightarrow \mathcal{X})$  とし、 $\mathcal{F}$  :: quasi-coherent sheaf on X とする。今,補題 (2.7) の証明から  $\mathcal{I}^2 = 0$  が得られる。また,明らかに  $\mathcal{O}_X/\mathcal{I} \cong \mathcal{O}_X$ . したがって次の SES(short exact sequence) が存在する.

$$0 \longrightarrow \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F} \longrightarrow \mathcal{I}^{d}\mathcal{F} \longrightarrow \mathcal{I}^{d}\mathcal{F} \otimes_{\mathcal{O}_{\mathcal{X}}} \mathcal{O}_{\mathcal{X}} \longrightarrow 0$$

<sup>†3</sup> local on codomain に考えれば、特に全単射性が示せる.

次の LES が誘導される.

$$0 \longrightarrow H^0(\mathcal{X}, \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F}) \longrightarrow H^0(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F}) \longrightarrow H^0(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X)$$

$$\longrightarrow H^1(\mathcal{X}, \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F}) \longrightarrow H^1(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F}) \longrightarrow H^1(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X)$$

. . .

sheaf cohomology は abelian group の cohomology として構成されており、module structure とは無関係 に定まっている。そして X と  $\mathcal X$  は homeo。したがって

$$H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d \mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X) = H^i(X, \mathcal{I}^d \mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X) = 0.$$

最後の等号は  $\mathcal{I}^d\mathcal{F}\otimes\mathcal{O}_X$  :: quasi-coherent  $\mathcal{O}_X$ -module と [3] Thm III.3.7 から得られる.

 $d=1(\implies \mathcal{I}^{d+1}=0)$  からはじめて d についての帰納法により

$$H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^{d+1}\mathcal{F}) = H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F} \otimes \mathcal{O}_X) = 0 \ (i > 0).$$

よって LES から  $H^i(\mathcal{X}, \mathcal{I}^d\mathcal{F}) = 0 (i > 0)$ . [3] Thm III.3.7 から  $\mathcal{X}$  :: affine.

### 補題 **3.2** ([8] Thm1.2.4)

X :: affine, nonsingular, finite type scheme over a field k とする. この時, X の first order deformation は自明な deformation ::  $X \times_k \operatorname{Spec} D$  しか存在しない.

(証明). 上の補題から、deformation of  $X = \operatorname{Spec} A$  は affine. そこで  $\mathcal{X} = \operatorname{Spec} B$  とする.

$$B \xrightarrow{\longrightarrow} A$$

$$f \mid \text{p.b.} \mid$$

$$D \xrightarrow{\longrightarrow} k$$

f :: flat と、f の唯一の fiber ::  $X = \operatorname{Spec} A$  が smooth であることから、[3] Thm III.10.2 より f :: smooth. 次の commutative diagram を考える.

$$B \xrightarrow{\longrightarrow} A$$

$$f \downarrow \qquad 0 \qquad \uparrow \mod \epsilon A$$

$$D \xrightarrow{\longrightarrow} A \otimes_k D$$

 $f::(\epsilon D\text{-})$ smooth over D なので、図式を可換にする射  $\phi:B\to A\otimes D$  が存在する.以下の主張から  $\phi::$  iso なので、任意の deformation of X:: Spec B は自明な deformation :: Spec  $A\otimes D=X\times\mathbb{I}$  と同型である.

### 主張 **3.3** ([8] Lemma A.4)

 $R:: \text{ring}, I:: \text{ideal of } R, F, G:: R\text{-module}, G:: \text{flat}, f: F \to G:: \text{homomorphism of } R\text{-modules}.$ 

I:: nilponent とし、誘導される homomorphism  $f\otimes_R \mathrm{id}_{R/I}: F/IF \to G/IF$  が同型であるとする.この時,f:: iso.

(証明).  $C = \operatorname{coker} f$  とする. 完全列  $F \to G \to C \to 0$  に  $\otimes_R(R/I)$  を作用させる.

$$F/IF \longrightarrow G/IG \longrightarrow C/IC \longrightarrow 0$$

仮定から C/IC=0. 今 I :: nilponent なので  $I\subset \operatorname{Jac}(R)$ . したがって中山の補題から C=0. すなわち f :: surj.

 $K = \ker f$  とする. 完全列  $0 \to K \to F \to G \to 0$  に  $\otimes_R(R/I)$  を作用させる.

$$0 \longrightarrow K/IK \longrightarrow F/IF \longrightarrow G/IG \longrightarrow 0$$

今, G :: flat から  $\operatorname{Tor}_R(G,R/I)=0$ . なのでこの SES から誘導される  $\operatorname{Tor}_R(-,R/I)$  の LES を考えると,  $K\otimes (R/I)\cong K/IK=0$  が得られる. 再び中山の補題から K=0. よって f :: inj.

### 補題 **3.4** ([8] Lemma1.2.6)

任意のk-algebra :: A について、次の群同型がある.

$$\left\{ \begin{array}{l} D\text{-automorphism of } A \otimes_k D \\ \text{inducing identity on } A \end{array} \right\} \cong \mathrm{Der}_k(A).$$

D-automorphism of  $A \otimes_k D$  のことを infinitesimal automorphism と呼ぶ.

(証明). 仮定から automorphism of  $A \otimes_k D = A[\epsilon]$  は D-module homomorphism で, $\operatorname{mod} \epsilon A \otimes (\epsilon D)$  を合成すると identity になる. したがって次のように書ける.

$$\theta(x) = x + \epsilon D(x).$$

 $\theta$  が積を保つことと *D*-module homo. であることから, $D: A \otimes D \to A:: D$ -derivation.

 $\Omega_{A\otimes_k D/D}\cong\Omega_{A/k}\otimes_k D$  に注意すると、 $\theta$  と  $\mathrm{Der}_k(A)$  の対応が分かる.この対応が群準同型であることは明らか.

## 定理 3.5 ([8] Prop1.2.9)

X:: separated nonsingular scheme of finite type over k とする。特に, X:: nonsingular (abstruct) variety over K であればよい。この時,first oder deformation of X の同値類は  $H^1(X,\mathcal{T}_X)$  の元と一対一に対応する。

(証明).  $\mathcal{X}$  :: first oder deformation of X を任意の取る. そして affine open cover of X::  $\{U_i\}_{i\in I}$  を任意に取る. この cover についての Čech cohomology を考えていく.

今,  $\mathcal{X}|_{U_i}$  :: first order deformation of  $U_i$ . 定理 (3.2) より,  $\theta_i:U_i\times_k\mathbb{I}\to\mathcal{X}|_{U_i}$  が得られる. これを用いて, 各  $i,j\in I$  について

$$\theta_{ij} = \theta_i^{-1} \circ \theta_j : U_{ij} \times \mathbb{I} \to U_{ij} \times \mathbb{I}$$

が得られる。ただし  $U_{ij}=U_i\cap U_j$  (以降の  $U_{ijk}$  なども同様)。補題 (3.4) から,これは  $d_{ij}\in\Gamma(U_{ij},\mathcal{T}_X)$  に対応する.

 $\theta_{ij}$  は貼り合わせることが出来るのだから、Gluing Lemma を参照すれば  $\theta_{ij}\theta_{jk}\theta_{ik}^{-1}=\mathrm{id}_{U_{ijk}\times\mathbb{I}}$  が得られる、補題 (3.4) の準同型で写せば、

$$d_{ij} + d_{jk} - d_{ik} = 0$$

すなわち Čeck 1-cocycle condition が得られる.

first order deformation of X が 2 つあり,その間に同型があるとしよう:  $\Psi: \mathcal{X} \to \mathcal{X}'$ .  $\mathcal{X}'$  について  $\theta'_{ij}, d'_{ij}$  を  $\mathcal{X}$  同様に定める.次の infiniterimal automorphism を考える.

$$\alpha_i = \theta_i' \circ \Psi|_{U_i} \circ \theta_i : U_i \times \mathbb{I} \to \mathcal{X}|_{U_i} \to \mathcal{X}'|_{U_i} \to U_i \times \mathbb{I}.$$

 $\alpha_i$  に  $a_i \in \Gamma(U_i, \mathcal{T}_X)$  が対応しているとする. 計算すると  $(\alpha_i|_{U_{ij}})^{-1}\theta'_{ij}(\alpha_i|_{U_{ij}}) = \theta_{ij}$  が得られる. すなわち,

$$d'_{ij} - d_{ij} = a_i - a_j.$$

よって  $\{d_{ij}\}$  の同値類と  $\{d'_{ij}\}$  の同値類は  $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)$  の中で等しい.

以上より、 $\mathcal{X}$  から  $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)$  の元への対応は単射的である。逆に  $\{d_{ij}\}$  から  $\{\theta_{ij}\}$  の対応、 $\theta_{ij}$  による  $U_i \times \mathbb{I}$  の貼り合わせへと手順を遡れば、 $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)$  の元と first order deformation of X への対応が全射だと分かる。

最後に,
$$[3]$$
 Thm III. $4.5$  から  $\check{H}^1(X,\mathcal{T}_X)\cong H^1(X,\mathcal{T}_X)$ .

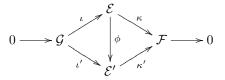
## 4 Extension of Sheaves

## 4.1 Definitions

定義 **4.1** (Extension of Sheaves) (i)  $\mathcal{F}, \mathcal{G} :: \mathcal{O}_X$ -module on ringed space X とする. extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  とは、次のような完全列のこと.

$$(\mathcal{E}, \iota, \kappa): 0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

(ii)  $(\mathcal{E}, \iota, \kappa) \to (\mathcal{E}', \iota', \kappa')$  :: homomorphism of extensions of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  とは、次の図式を可換にする homomorphism of sheaves ::  $\phi: \mathcal{E} \to \mathcal{E}'$  のこと.



(iii)  $f: \mathcal{F}' \to \mathcal{F}$  と  $(\mathcal{E}, \iota, \kappa)$  :: extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  について, $\mathcal{E}f^*$  :: pullback of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  を次で定める. これが extension of  $\mathcal{F}'$  by  $\mathcal{G}$  になっていることは簡単に確かめられる.まず,sheaf としては  $\mathcal{E}f^*$  は

$$\mathcal{E}f^* = \{ \langle U, e \oplus x' \rangle \in \mathcal{E} \oplus \mathcal{F}' \mid \kappa_U(e) = f_U(x') \}.$$

 $\iota_{\mathcal{E}f^*}, \kappa_{\mathcal{E}f^*}$  は次で定める.

$$\iota_{\mathcal{E}f^*}: \mathcal{G} \to \mathcal{E}f^*; \qquad \langle U, y \rangle \mapsto \langle U, \iota(y) \oplus 0 \rangle$$
  
 $\kappa_{\mathcal{E}f^*}: \mathcal{E}f^* \to \mathcal{F}'; \qquad \langle U, e \oplus x' \rangle \mapsto \langle U, y' \rangle$ 

定義を終えた後に,  $\mathcal{E}f^*$  が実際に pullback of f and  $\kappa$  であることを示す.

(iv)  $g: \mathcal{G} \to \mathcal{G}'$  と  $(\mathcal{E}, \iota, \kappa)$  :: extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  について,  $g_*\mathcal{E}$  :: pushout of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  を次で定める. これが extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}'$  になっていることは簡単に確かめられる. まず, sheaf としては  $g_*\mathcal{E}$  は次の準同型の cokernel である.

$$\mathcal{G} \to \mathcal{G}' \oplus \mathcal{E}; \qquad \langle U, y \rangle \mapsto \langle U, q_U(y) \oplus (-\iota_U(y)) \rangle.$$

 $\iota_{g_*\mathcal{E}}, \kappa_{g_*\mathcal{E}}$  は次で定める.

$$\iota_{g_*\mathcal{E}} : \mathcal{G}' \to g_*\mathcal{E}; \qquad \langle U, y' \rangle \mapsto \langle U, [y', 0] \rangle$$
  
$$\kappa_{g_*\mathcal{E}} : g_*\mathcal{E} \to \mathcal{F}; \qquad \langle U, [y', e] \rangle \mapsto \kappa_U(e)$$

定義を終えた後に,  $g_* \mathcal{E}$  が実際に pushout of g and  $\iota$  であることを示す.

extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  が成す集合を  $E(\mathcal{F},\mathcal{G})$  と書く.

### 定理 4.2

 $\mathcal{F},\mathcal{G}::\mathcal{O}_X$ -modules on ringed scheme ::X とする. この時, extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}::\mathcal{E}:0\to\mathcal{G}\to\mathcal{E}\to\mathcal{F}\to0$  から誘導される doundary map

$$d_{\mathcal{E}}: \operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{G}, \mathcal{G}') \to \operatorname{Ext}^1(\mathcal{F}, \mathcal{G}')$$

は,  $g \in \operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{G},\mathcal{G}')$ を  $g_*\mathcal{E}$ の同型類に写す. 特に,

$$\Phi: E(\mathcal{F}, \mathcal{G}) \ni \mathcal{E} \mapsto d_{\mathcal{E}}(\mathrm{id}_{\mathcal{G}}) \in \mathrm{Ext}^{1}_{\mathcal{O}_{X}}(\mathcal{E}, \mathcal{G})$$

は全単射である.

「特に」以降は特に有名で、例えば [3] ExIII.6.1 に証明の方針が述べられているし、加群の場合の類似の結果としては [10] pp.259-264 に詳しい証明がある.

定義 **4.3**(1) split extesion of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  を  $0_{\mathcal{F},\mathcal{G}}$  あるいは単に 0 と書く.

$$0_{\mathcal{F},\mathcal{G}}:\ 0\longrightarrow\mathcal{G}\longrightarrow\mathcal{F}\oplus\mathcal{G}\longrightarrow\mathcal{F}\longrightarrow 0$$

- (2)  $(\mathcal{E}, \iota, \kappa)$  :: extension of sheaves について,  $-\mathcal{E} := (\mathcal{E}, -\iota, \kappa)$  と定める.
- (3) (The Baer sum)  $(\mathcal{E}, \iota, \kappa), (\mathcal{E}', \iota', \kappa')$  :: extensions of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  に対し、 $\mathcal{E} + \mathcal{E}'$  を以下のように定める.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \oplus \mathcal{G} \xrightarrow{\iota \oplus \iota'} \mathcal{E} \oplus \mathcal{E}' \xrightarrow{\kappa \oplus \kappa'} \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\nabla \downarrow \qquad \downarrow$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{M} \longrightarrow \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \uparrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad$$

ただし  $\Delta: a \mapsto (a, a), \nabla: (a, b) \mapsto a + b$ .

## 4.2 Propositions.

### 補題 4.4

以下の図式が可換であり、各行は完全であるとする.

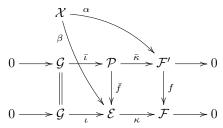
$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{P} \longrightarrow \mathcal{F}' \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow^{f}$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

この時,  $\mathcal{P}$  は pullback of f and  $\kappa$ .

(証明). 以下,  $x \in \mathcal{X}$  と書いたら, x は適当な開集合 U 上の  $\mathcal{X}$  の section ::  $x \in \mathcal{X}(U)$  を意味する. 各射に次のように名前を付ける.



- $\blacksquare \phi: \mathcal{X} \to \mathcal{P}$  の構成. 任意の  $x \in \mathcal{X}$  をとり、これに対して  $y \in \mathcal{P}$  を以下のように定める.
  - 1.  $x' \in \mathcal{P}$  を  $\bar{\kappa}(x') = \alpha(x)$  なるものとする.  $\bar{\kappa}$  :: surj ゆえ x' が存在することに注意.

  - 3.  $p = x' + \bar{\iota}(t')$  とする.
- こうして得られる写像  $x \mapsto p$  が  $\phi: \mathcal{X} \to \mathcal{P}$  を与える.

可換性を確認しよう.

$$\bar{\kappa}(\psi(x)) = \bar{\kappa}(x') + \bar{\kappa}(\bar{\iota}(t')) = \bar{\kappa}(x') = \alpha(x),$$

$$\bar{f}(\psi(x)) = \bar{f}(x') + \bar{f}(\bar{\iota}(t')) = \bar{f}(x') + \iota(t') = \bar{f}(x') + \beta(x) - \bar{f}(x') = \beta(x).$$

**■** $\phi$  :: well-defined. x=0 の時  $\phi(x)=0$  であることを見れば十分. x=0 ならば  $\bar{\kappa}(x')=0$  すなわち  $x'\in\ker\bar{\kappa}=\operatorname{im}\bar{\iota}$ . なので、 $\bar{\iota}(h)=x'$  となる  $h\in\mathcal{G}$  がとれる.

$$\iota(t') = \beta(0) - \bar{f}(x') = -\bar{f}\bar{\iota}(h) = \iota(-h).$$

 $\iota$  :: inj. より t' = -h. したがって

$$p = x' + \bar{\iota}(t') = \bar{\iota}(h) + \bar{\iota}(-h) = 0.$$

■ $\mathcal{X} \to \mathcal{P}$  の一意性. 最後に  $\phi, \phi': \mathcal{Z} \to \mathcal{E}f^*$  が同じ可換性を持つと仮定して  $\psi = \phi - \phi' = 0$  を示す. 仮定から  $\bar{\kappa}\psi = 0, \bar{f}\psi = 0$  が成立する. まず前者から

$$\operatorname{im} \psi \subseteq \ker \bar{\kappa} = \operatorname{im} \bar{\iota}$$

なので任意の  $x \in \mathcal{X}$  に対して  $g \in \mathcal{G}$  が存在し、 $\bar{\iota}(g) = \psi(x)$  となる。図式の可換性から次が成立する.

$$\iota(g) = \bar{f}\bar{\iota}(g) = \bar{f}\psi(x) = 0.$$

行の完全性から  $\iota$  は単射なので g=0. 任意の x に対して  $\psi(x)=\overline{\iota}(g)=\overline{\iota}(0)=0$ . すなわち  $\psi=0$ .

### 補題 4.5

以下の図式が可換であり、各行は完全であるとする.

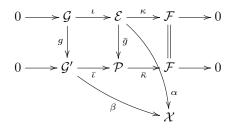
$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \parallel \qquad \qquad \downarrow$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G}' \longrightarrow \mathcal{P} \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

この時,  $\mathcal{P}$  は pushout of g and  $\iota$ .

(証明). 各射に次のように名前を付ける.



- 1.  $\kappa(e) = \bar{\kappa}(p)$  となる  $e \in \mathcal{E}$  をとる.  $\kappa$  :: surj. ゆえ e が存在することに注意.
- 2.  $\bar{\iota}(g') = p \bar{g}(e)$  となる  $g' \in \mathcal{G}'$  をとる.  $p \bar{g}(e) \in \ker \bar{\kappa} = \operatorname{im} \bar{\iota}$  ゆえ g' が存在することに注意.

すると  $p = \bar{g}(e) + \bar{\iota}(g')$  となる. 実際,

$$\bar{q}(e) + \bar{\iota}(q') = \bar{q}(e) + (p - \bar{q}(e)) = p.$$

 $\blacksquare \phi: \mathcal{P} \to \mathcal{X}$  の構成.  $p \in \mathcal{P}$  に対して, $p = \bar{g}(e) + \bar{\iota}(g')$  となる  $e \in \mathcal{E}, g' \in \mathcal{G}'$  をとる.これを元に  $\phi(p) = \alpha(e) + \beta(g')$  とする.すると明らかに  $\phi \circ \bar{g} = \alpha, \phi \circ \bar{\iota} = \beta$  が成立する. $\phi$  が well-defined なら module homomorphism になることは明らか.

■ $\phi$ :: well-defined.  $(p=)\bar{g}(e)+\bar{\iota}(g')=0$  となる  $e\in\mathcal{E},g'\in\mathcal{G}'$  をとる.  $\alpha(e)+\beta(g')=0$  となることを示せば良い. まず, $0=\bar{\kappa}(\bar{g}(e)+\bar{\iota}(g'))=\kappa(e)$ . したがって  $e\in\ker\kappa=\operatorname{im}\iota$  であり, $\iota(h)=e$  を満たす  $h\in\mathcal{G}$  が存在する.

$$0 = \bar{g}(e) + \bar{\iota}(g') = \bar{g}\iota(h) + \bar{\iota}(g') = \bar{\iota}(g(h) + g').$$

 $\bar{\iota}$  :: inj  $\sharp \mathfrak{h} g(h) + g' = 0$ .  $\sharp \mathfrak{I} \mathfrak{I}$ 

$$\alpha(e) + \beta(g') = \alpha \iota(h) + \beta(-g(h)) = 0.$$

 $\blacksquare \phi$ :: unique.  $\phi': \mathcal{P} \to \mathcal{X}$  も  $\phi$  と同様の条件を満たすとする.  $P = \bar{\iota}(\mathcal{G}') + \bar{g}(\mathcal{E})$  なので,

$$\phi'(p) = \phi'(\bar{g}(e) + \bar{\iota}(g')) = \alpha(e) + \beta(g') = \phi(p).$$

## 補題 4.6

 $g, g': \mathcal{G} \to \mathcal{G}'$  と、extension of  $\mathcal{F}$  by  $\mathcal{G}$  をとる.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \longrightarrow \mathcal{E} \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

以下が成り立つ.

- (a)  $0_* \mathcal{E} = 0_{\mathcal{F}, \mathcal{G}'}$ ,
- (b)  $q_*(-\mathcal{E}) = -q_*\mathcal{E}$ ,
- (c)  $g_*\mathcal{E} + g'_*\mathcal{E} = (g + g')_*\mathcal{E}$ .

(証明).

■proof of (a). 以下の図式は可換である.

よって pushout の一意性から  $0_*\mathcal{E} \cong \mathcal{G}' \oplus \mathcal{F} = 0_{\mathcal{F},\mathcal{G}'}$ .

■proof of (b). 以下の可換図式を見よ.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{(-1)} \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \parallel$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G}' = \mathcal{G}' \longrightarrow g_*(-\mathcal{E}) \longrightarrow \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

(-1) は同型であることと、 $g \circ (-1) = (-1) \circ g$  から、以下も可換図式.

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} = \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow g \downarrow \qquad \qquad \downarrow p.o. \qquad \downarrow \qquad \qquad \parallel \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad$$

よって pushout の一意性から  $g_*(-\mathcal{E}) \cong -g_*\mathcal{E}$ . また  $g_*(\mathcal{E}) \cong (-g)_*\mathcal{E}$  も分かる.

■proof of (c).

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \xrightarrow{\iota} \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa} \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

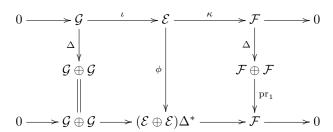
$$\Delta \downarrow \qquad \Delta \downarrow \qquad \Delta \downarrow \qquad \Delta \downarrow \qquad 0$$

$$0 \longrightarrow \mathcal{G} \oplus \mathcal{G} \xrightarrow{\iota \oplus \iota} \mathcal{E} \oplus \mathcal{E} \xrightarrow{\kappa \oplus \kappa} \mathcal{F} \oplus \mathcal{F} \longrightarrow 0$$

$$\downarrow \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow \qquad \qquad \qquad$$

今,この図式は可換であり、各行は完全列である.  $(\kappa \oplus \kappa) \circ \Delta = \Delta \circ \kappa$  なので、pullback  $(\mathcal{E} \oplus \mathcal{E})\Delta^*$  の普遍

性から、図式を可換に保つ  $\phi = \langle \Delta, \kappa \rangle : \mathcal{E} \to (\mathcal{E} \oplus \mathcal{E}) \Delta^*$  が存在する.



右の縦の射は合成すると恒等射. したがって左の四角形は pushout diagram. pushout の一意性から一意性から  $(\mathcal{E}\oplus\mathcal{E})\Delta^*\cong\Delta^*\mathcal{E}$ .

このことから求める同型が得られる.

$$g_*\mathcal{E} + g_*'\mathcal{E} = \nabla_*(g_*\mathcal{E} \oplus g_*'\mathcal{E})\Delta^*$$

$$= \nabla_*(g \oplus g')_*(\mathcal{E} \oplus \mathcal{E})\Delta^*$$

$$= (\nabla_*(g \oplus g')_*\Delta_*)\mathcal{E}$$

$$= (\nabla \circ (g \oplus g') \circ \Delta)_*\mathcal{E}$$

$$= (g + g')_*\mathcal{E}.$$

(2 つめの等号は自明.)

#### 補題 4.7

 $\mathcal{F},\mathcal{G}::\mathcal{O}_X$ -modules on ringed scheme :: X とする. この時,  $E(\mathcal{F},\mathcal{G})$  には加法群の構造が定まる.

(証明).  $0_{\mathcal{F},\mathcal{G}}$  が Bear sum についての単位元であること,

$$\mathcal{E} + 0 = \mathrm{id}_* \mathcal{E} + 0_* \mathcal{E} = (\mathrm{id} + 0)_* \mathcal{E} = \mathrm{id}_* \mathcal{E} = \mathcal{E}.$$

 $-\mathcal{E}$  が逆元であること,

$$\mathcal{E} + (-\mathcal{E}) = \mathrm{id}_* \mathcal{E} + (-\mathrm{id})_* \mathcal{E} = (\mathrm{id} - \mathrm{id})_* \mathcal{E} = 0_* \mathcal{E} = 0.$$

可換性.

$$\mathcal{E} + \mathcal{E}' = \nabla_* (\mathcal{E} \oplus \mathcal{E}') \Delta^* = \nabla_* (\mathcal{E}' \oplus \mathcal{E}) \Delta^* = \mathcal{E}' + \mathcal{E}.$$

結合律が成り立つこと,

$$\begin{split} &(\mathcal{E}_1 + \mathcal{E}_2) + \mathcal{E}_3 \\ = & \nabla_* ((\mathcal{E}_1 + \mathcal{E}_2) \oplus \mathcal{E}_3) \Delta^* \\ = & \nabla_* ((\nabla_* (\mathcal{E}_1 \oplus \mathcal{E}_2) \Delta^*) \oplus \mathcal{E}_3) \Delta^* \end{split}$$

(TODO)

### 補題 4.8

全単射  $\Phi: E(\mathcal{F},\mathcal{G}) \to \operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_Y}(\mathcal{E},\mathcal{G})$  は加法群の間の同型である.

(証明). 最初に次のことに注意する:  $f+f'=\nabla\circ (f\oplus f')\circ \Delta$ . したがって  $\mathrm{Hom}(\mathcal{F},\mathcal{G})$  の加法は次のように定まる.

$$+: \mathrm{Hom}(\mathcal{F},\mathcal{G})^{\oplus 2} = \mathrm{Hom}(\mathcal{F}^{\oplus 2},\mathcal{G}^{\oplus 2}) \xrightarrow{(\circ \Delta)} \mathrm{Hom}(\mathcal{F}^{\oplus 2},\mathcal{G}) \xrightarrow{(\nabla \circ)} \mathrm{Hom}(\mathcal{F},\mathcal{G})$$

## 5 First Order Deformation of a Local Complete Intersection.

この節は 5.14 を証明するための必要最低限の定義と命題のまとめである。元の命題と比較して,このノートでは X を  $\mathbb{C}$  上のものに限定し,deformation  $\mathfrak{t}$  ー般の local artinian ring ではなく  $D=\mathbb{C}[\epsilon]$  に限定している。したがって formal deformation([9] 6.1), abstruct lifting([9] 4.2), first order deformation が一致している。

以下,この節では X を以下のようなものとする ([9] Hypotheses4.1). この条件を ( $\dagger$ ) と呼ぶ.

- flat.
- generically smooth,
- local complete intersection,
- finite type

scheme over  $\mathbb{C}$ .

特に stable curve over  $\mathbb C$  はこれらの条件を満たす.

"local complete intersection"の定義を改めて書き下しておく.

## 定義 **5.1** ((local) complete intersection [9] p.21, [3] p.185)

X:: scheme of finite type over  $\mathbb C$  が complete intersection であるとは次が成立すること: X は P:: smooth scheme over  $\mathbb C$  ([3] III.10) に埋め込まれ,さらに ideal sheaf::  $\ker(X \hookrightarrow P)$  が  $\operatorname{codim}(P,X)$  個の global section で生成されること ([3] p.121).

X:: scheme of finite type over  $\mathbb C$   $\mathring{\mathfrak w}$  locally complete intersection であるとは  $\mathfrak U$ :: open covering of X が存在し、任意の  $U\in \mathfrak U$   $\mathring{\mathfrak w}$  complete intersection であること.

議論は、 $\nu(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$ 、 $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$ 、 $e(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$  の対応の連鎖である。これらはいずれも first order deformations  $:: \mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2$  の「差」を表現する量である。ここでの「差」の意味を理解するには、最初に命題 (5.10)、(5.11) のステートメントを見るのが良い。そして自明な first order deformation of  $X:: X \times D$  と与えられた first order deformation の「差」である  $e(\mathcal{X},X \times D)$  によって first order deformation of X を分類する(定義 5.13)。

## 定理 5.2

M':: flat scheme of finite type over  $D \succeq \cup$ ,  $M = M'_0$  (fiber of  $M' \to \operatorname{Spec} D$  at 0)  $\succeq \dagger \circlearrowleft$ .

 $X\subseteq M$  が (†) を満たす時,  $\mathcal{X}\subseteq M'$  :: first order deformation of X も local complete intersection である.

## 5.1 $\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$

## 定義 5.3

X:: complete intersection over  $\mathbb C$  embedded in P とする. これの ideal sheaf を  $\mathcal I\subseteq\mathcal O_P$  とする.  $\mathcal X_1,\mathcal X_2::$  first order deformation of X とすると, $\mathcal X_1,\mathcal X_1::$  embedded in P となる.そこで ideal sheaf を それぞれ  $\mathcal I_1,\mathcal I_2\subseteq\mathcal O_P$  とする.first order deformation of X の定義から, $\mathcal I_i/\epsilon\mathcal I_i\cong\mathcal I$  (i=1,2).

写像  $\mathcal{I} \to (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X$  を以下のように定める. まず、 $\langle U, f \rangle \in \mathcal{I}$  に対し、

$$\langle U, \tilde{f}_i \rangle \mod \epsilon \mathcal{I}_i = \langle U, f \rangle \ (i = 1, 2)$$

となる  $\langle U, \tilde{f}_i \rangle$  が存在する. そこで

$$\langle U, f \rangle \mapsto \langle U, \tilde{f}_1 - \tilde{f}_2 \rangle \mod(\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{I} \in (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} (\mathcal{O}_P / \mathcal{I}) = (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X$$

と写す. これは  $\tilde{f}_i$  のとり方に依らず, well-defined. この写像を  $\nu(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_1)$  と書く.

以下の $\mathbb{C}$ -module としての同型があるため、 $\nu(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$  を以下のいずれの集合の元ともみなす.

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_{P}}(\mathcal{I}, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{X})$$

$$\cong \operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_{P}}(\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2}, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_{X})$$

$$\cong H^{0}(X, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} (\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2})^{\hat{}})$$

$$\cong (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} H^{0}(X, (\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2})^{\hat{}})$$

$$\cong H^{0}(X, (\mathcal{I}/\mathcal{I}^{2})^{\hat{}})$$

## 命題 **5.4** ([9] Prop2.8a,b,c,d,e)

P' :: flat scheme of finite type over  $D, P = P'_0, X$  :: complete intersection embedded in P とする.

- (a)  $\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) = 0 \iff \mathcal{X}_1 = \mathcal{X}_2$ .
- (b)  $\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) + \nu(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_3) = \nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_3).$
- (c)  $\nu(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_1) = -\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$ .
- (d) 任意の  $\mathcal{X}$  :: first order deformation of X, 任意の  $\nu \in H^0(X,(\mathcal{I}/\mathcal{I}^2)^{\hat{}})$  に対し, $\mathcal{Y}$  :: first order deformation of X が存在して, $\nu = \nu(\mathcal{X},\mathcal{Y})$  となる.
- (e) U:: open subset of X  $\bowtie \cap \cap \cap$ ,  $\nu(\mathcal{X}_1|_U,\mathcal{X}_2|_U) = \nu(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)|_U : (\mathcal{I}/\mathcal{I}^2)|_U \to (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_U$ .

(証明). (d) のみ証明する. 他は自明であろう.

 $\mathcal{I}$  :: ideal sheaf of X,  $\mathcal{I}'$  :: ideal sheaf of  $\mathcal{X}$  とし、sheaf of ideal ::  $\mathcal{J} \subseteq \mathcal{O}_{P'}$  を次のように定める。ただし  $\mathcal{I}_P = \ker(P \hookrightarrow P')$ . sheaf  $\mathcal{O}$  section は全て open subset in P' :: U 上のものである。(これが sheaf of ideal であることは自明。)

$$\mathcal{J} = \{ \tilde{f}' \in \mathcal{O}_{P'} \mid \tilde{f}' \bmod \epsilon \mathcal{I}_P =: f \in \mathcal{I} \text{ and } \exists f' \in \mathcal{I}', \quad (f' - \tilde{f}') \bmod \epsilon \mathcal{I} = v_U(f) \}$$

 $\mathcal J$  で定まる P の subscheme ::  $\mathcal Y$  が X の deformation であることを示す.これは自然な全射  $(\times \epsilon)$  :  $\mathcal J/\epsilon\mathcal J \to \epsilon\mathcal J$  が単射(したがって同型)であることを示せば良い ([9] Lemma 2.6). (TODO)

## 5.2 $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$

### 補題 5.5

X:: complete intersection over  $\mathbb{C}$  embedded in P とし,ideal sheaf は  $\mathcal{I} \subseteq \mathcal{O}_P$  であるとする.この時,  $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$ :: locally free sheaf of rank  $n := \dim X$ .

(証明). local な問題なので、 $x \in X \subset P$  での  $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$  の stalk が free module であることを示す。 $A := \mathcal{O}_{P,x}$  とし、 $I := \mathcal{I}_x$  を生成する regular sequence を  $x_1, \ldots, x_r$  とする。[2] Lemma A.6.1 より(この文献の証明は

同値な命題 [6] Thm16.2 のものより美しい),graded ring として  $(A/I)[t_1,\ldots,t_r]\cong\bigoplus_{d\geq 0}(I^d/I^{d+1})$ . 1次成分の同型から  $(A/I)^{\oplus r}\cong I/I^2$ .

### 補題 5.6 (First Fundamental Exact Sequence)

X:: **complete intersection** over  $\mathbb{C}$  embedded in P とし,ideal sheaf は  $\mathcal{I} \subseteq \mathcal{O}_P$  であるとする.この時,以下は exact.

$$0 \longrightarrow \mathcal{I}/\mathcal{I}^2 \xrightarrow{d} (\Omega_{P/\mathbb{C}})|_X \longrightarrow \Omega_{X/\mathbb{C}} \longrightarrow 0$$

すなわち,  $(\Omega_{P/\mathbb{C}})|_X$  :: extension of  $\Omega_{X/\mathbb{C}}$  by  $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$ .

(証明). よく知られている通り、最初の射が単射であることを示しさえすれば良い.

 $\mathcal{K}=\ker d$  とすると,  $\mathcal{K}\subseteq\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$ . したがって  $\mathcal{I}/\mathcal{I}^2$  同様  $\mathcal{K}$  も locally free. 一方, [3] ThmII.8.17(2) の証明より d は irreducible point の近傍で injective. したがって Supp  $\mathcal{K}$ :: support of  $\mathcal{K}$  は Sing  $\mathcal{X}$ ::  $\mathcal{X}$  の singular points である.  $\mathcal{X}$  についての仮定からこれは離散集合で、すなわち開集合を含まない。もし  $\mathcal{K}_x\neq 0$  ならば、 $\mathcal{K}$  は trivialization open cover を持たないので、 $\mathcal{K}$ :: locally free に反する。よって  $\mathcal{K}=\ker d=0$ .

### 定義 5.7

 $U \subseteq X$  :: complete intersection over  $\mathbb{C}$  embedded in P とする.  $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2$  :: first order deformation of X について、

$$\mathcal{E}(\mathcal{X}_1|_U, \mathcal{X}_2|_U) := \nu(\mathcal{X}_1|_U, \mathcal{X}_2|_U)_*((\Omega_{P/\mathbb{C}})|_U) = (\nu(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)|_U)_*((\Omega_{P/\mathbb{C}})|_U)$$

を extension of  $\Omega_{U/\mathbb{C}}$  by  $(\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_U$  として定める.

### 補題 5.8

 $U \subseteq X$ :: **affine complete intersection** over  $\mathbb C$  embedded in P とする. この時 X:: finite type over  $\mathbb C$  なので  $U \hookrightarrow \mathbb A^n_{\mathbb C}$ :: closed embedding が存在する. U:: first order deformation of  $U^{\dagger 4}$  について,  $U \hookrightarrow \mathbb A^n_{\mathbb C}$  の拡張  $U \hookrightarrow \mathbb A^n_D$  が存在する.

#### 補題 5.9

 $U\subseteq X$ :: **affine complete intersection** over  $\mathbb C$  embedded in P とする.  $P_1,P_2,P_3$ :: nonsingular affine scheme over  $\mathbb C$  と  $U\hookrightarrow P_i$  が与えられているとする.  $\mathcal P_i=P_i\times_{\mathbb C} D$  への U の lifting (first order deformation)::  $\mathcal U_i\to\mathcal P_i$  を任意にとり、対応する extension of  $\Omega_{U/\mathbb C}$  by  $(\epsilon D)\otimes_{\mathbb C} \mathcal O_U$  を  $\mathcal E_i$  とする.

この時同型  $\alpha_{j,i}: \mathcal{E}_i \xrightarrow{\cong} \mathcal{E}_j$  が存在し,cocycle condition ::  $\alpha_{1,3} = \alpha_{1,2} \circ \alpha_{2,3}$  が成立する.

したがって  $\{U_i\}$  :: open affine, complete intersection covering of X について, $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1|_{U_i},\mathcal{X}_2|_{U_i})$  の貼り合わせることが出来<sup>†5</sup>,こうして  $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$  を得る.

$$\mathcal{E}(\mathcal{X}_1|_U,\mathcal{X}_2|_U)|_V \cong (\nu(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)|_V)_*(\Omega_{P/\mathbb{C}}|_V) \cong \nu(\mathcal{X}_1|_V,\mathcal{X}_2|_V)_*(\Omega_{P/\mathbb{C}}|_V).$$

 $<sup>^{\</sup>dagger 4}$  補題 (3.1) よりこれも affine.

 $<sup>^{\</sup>dagger 5}$  次のことに注意して上の二つの補題を使う: restriction of sheaves to open subset は left adjoint functor であるから, pushout of extensions (colimit) を保つ,よって  $V \subseteq U$  について

## 命題 **5.10** ([9] Prop4.9a,b,c,f)

 $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2$ :: first order deformations of X とする.

- (a)  $\mathcal{E}(\mathcal{X}, \mathcal{X}) \cong 0_{\Omega_{X/\mathbb{C}}, (\epsilon D) \otimes \mathcal{O}_X}$ .
- (b)  $\mathcal{E}(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_1) = -\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$ .
- (c)  $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) + \mathcal{E}(\mathcal{X}_2, \mathcal{X}_3) \cong \mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_3)$ .
- (d) 任意の  $\mathcal{E}$  :: extension of  $\Omega_{X/\mathbb{C}}$  by  $(\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X$  と任意の  $\mathcal{X}$  :: first order deformation of X に対し,

$$\mathcal{E} \cong \mathcal{E}(\mathcal{X}, \mathcal{Y})$$

なる  $\mathcal{Y}$  :: first order deformation of X が存在する.

- (d) を命題 (5.11) の後に証明する. 他は命題 (5.4) の対応する命題と補題 (4.6) から得られる.
- 命題 **5.11** ([9] Prop3.9, Prop4.10) (a)  $\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2$  :: first order deformation of X とする. この時, splittings of  $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$  と isomorphisms ::  $\mathcal{X}_1 \cong \mathcal{X}_2$  の間に一対一対応がある. さらにこの対応を通して, extensions の加法と同型の合成が対応する $^{\dagger 6}$ .
- (b) また、 $\mathcal{E}_1, \mathcal{E}_2$  :: extension of sheaves とする. この時 splittings of  $\mathcal{E}_1 \mathcal{E}_2$  と isomorphisms ::  $\mathcal{E}_1 \cong \mathcal{E}_2$  の間に一対一対応がある.

命題 (5.10)(d) の証明. まず  $\{X_{\alpha}\}_{\alpha}$  を X の affine open cover とし, $\mathcal{X}_{\alpha}=\mathcal{X}|_{X_{\alpha}}$  とおく.  $\mathcal{X}$  :: finite type over  $\mathbb C$  なので,うまく cover を取れば  $\mathcal{X}_{\alpha}\hookrightarrow\mathbb{A}^n_{\mathbb C}$  が存在するように出来る.この embedding に対応する conormal bundle of  $X_{\alpha}$  を  $\mathcal{C}_{\alpha}$  とする.すると以下の SES が存在する.

$$E: 0 \longrightarrow \mathcal{C}_{\alpha} \longrightarrow \Omega_{\mathbb{A}^{n_{\alpha}}}|_{X_{\alpha}} \longrightarrow \Omega_{X_{\alpha}} \longrightarrow 0$$

この extension を  $E:=\Omega_{\mathbb{A}^{n_{\alpha}}}|_{X_{\alpha}}$  と略す.ここから Ext の LES が誘導される.

$$\operatorname{Hom}_{\mathcal{O}_{X_{\alpha}}}(\mathcal{C}_{\alpha}, (\epsilon D) \otimes \mathcal{O}_{X_{\alpha}}) \xrightarrow{d_{E}} \operatorname{Ext}^{1}_{\mathcal{O}_{X_{\alpha}}}(\Omega_{X_{\alpha}}, (\epsilon D) \otimes \mathcal{O}_{X_{\alpha}}) \longrightarrow \operatorname{Ext}^{1}_{\mathcal{O}_{X_{\alpha}}}(\Omega_{\mathbb{A}^{n_{\alpha}}}|_{X_{\alpha}}, (\epsilon D) \otimes \mathcal{O}_{X_{\alpha}}) = 0$$

右の = 0 は [3] Prop III.6.7, Prop III.6.3, Thm III.3.7 から得られる. したがって  $d_E$  :: surj.

なので定理 (4.2) より, $f_{\alpha}: \mathcal{C}_{\alpha} \to (\epsilon D) \otimes \mathcal{O}_{X_{\alpha}}$  と同型  $(f_{\alpha})_*E \cong \mathcal{E}|_{X_{\alpha}}$  が存在する.一方命題 (5.4) より, $f_{\alpha} = \nu(\tilde{\mathcal{X}}_{\alpha}, \mathcal{X}_{\alpha})$  を満たす first order deformation of  $X_{\alpha}$  ::  $\tilde{\mathcal{X}}_{\alpha} \subseteq \mathbb{A}_D^{n_{\alpha}}$  が存在する.

こうして得られる 
$$\{\mathcal{X}_{\alpha}\}_{\alpha}$$
 を貼り合わせる. 命題 (5.11) (TODO)

## 5.3 $e(X_1, X_2)$

### 定義 5.12

 $T^i(X) = \operatorname{Ext}_{\mathcal{O}_X}^i(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$  とおく.  $\mathcal{X}$  :: first order deformation of X に対し,

$$e(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2) \in \operatorname{Ext}^1(\Omega_{X/\mathbb{C}}, (\epsilon D) \otimes_{\mathbb{C}} \mathcal{O}_X) \cong (\epsilon D) \otimes T^1(X) \cong T^1(X) \cong \operatorname{Hom}((\epsilon D)^*, T^1(X))$$

を,  $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1,\mathcal{X}_2)$  に対応する元とする (4.2).

補題 (4.8) より、命題 (5.10)、(5.11) と同様の命題が  $e(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_2)$  についても性質する.

 $<sup>^{\</sup>dagger 6}$  すなわち  $\phi_1: \mathcal{X}_1 \cong \mathcal{X}_2, \phi_2: \mathcal{X}_2 \cong \mathcal{X}_3$  について、 $\phi_2 \phi_1: \mathcal{X}_1 \cong \mathcal{X}_3$  は  $\mathcal{E}(\mathcal{X}_1, \mathcal{X}_3)$  に対応する.

定義 5.13 (Kodaira-Spencer class/map, [9])

 $T^i(X) = \operatorname{Ext}^i_{\mathcal{O}_X}(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$  とおく.  $\mathcal{X}$  :: first order deformation of X に対し,

$$k_{\mathcal{X}} = e(\mathcal{X}, X \times D) \in T^1(X) \cong \operatorname{Hom}((\epsilon D)^*, T^1(X))$$

とおく. この  $k_{\mathcal{X}}$  を Kodaira-Spencer class of  $\mathcal{X}$  と呼ぶ、対応する写像  $K_{\mathcal{X}}: (\epsilon D)^*, T^1(X)$  を Kodaira-Spencer map of  $\mathcal{X}$  と呼ぶ、

## 5.4 Complete Classification.

### 定理 5.14

First order deformation of X の同値類と  $\operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X)$  の元は一対一に対応する. (cf. [9] Prop 6.12)

(証明). 命題 
$$(5.10)$$
,  $(5.11)$  より, $\mathcal{X} \mapsto k_{\mathcal{X}}$  がこの対応を与えることは明らか.

#### 系 5.15

X:: nonsingular and have finite dimention ならば、First order deformation of X の同値類と  $H^1(X,\mathcal{T}_X)$  の元は一対一に対応する.

(証明). 仮定より、 $\Omega_{X/\mathbb{C}}$  :: locally free sehaf of finite rank. したがって [3] PropIII.6.7, Prop II.6.3 から次の同型が成立する.

$$\operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{O}_X \otimes \Omega_{X/\mathbb{C}}, \mathcal{O}_X) \cong \operatorname{Ext}^1_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{O}_X, \mathcal{T}_X \otimes \mathcal{O}_X) \cong H^1(X, \mathcal{T}_X)$$

# 6 Two Examples of Other Deformation Theories

deformation theory の対象は scheme の他にもある. 例えば、次の二つがある.

Deformation of a coherent sheaf :: F on a scheme X, over a fixed scheme -

 $\mathcal{X}$  :: deformation of X over  $(S,s_0)$  とする. deformation of F over X とは, $\mathcal{F}$  :: flat coherent sheaf on  $\mathcal{X}$  と homomorphism ::  $\phi:\mathcal{F}\to F$  の組であって,誘導される射

$$\phi \otimes_{\mathcal{O}_X} 1_{\mathcal{O}_X} : \mathcal{F} \otimes_{\mathcal{O}_X} \mathcal{O}_X \to F$$

が同型であるもの. (ref. [4] §7, p.53)

Deformation of a map  $f: X \to Y$  with both X and Y fixed -

X,Y:: scheme,  $(S,s_0)::$   $\mathbb{C}$ -pointed scheme,  $f:X\to Y::$  morphism とする. Deformation of a map  $f:X\to Y$  with both X and Y fixed とは morphism  $:: \bar{f}:X\times S\to Y\times S$  であって, $\bar{f}|_{X\times\{s_0\}}=f$  であるもの. (ref. [5]p.93)

それぞれ、first order deformation が成す空間が分かっている.

## 定理 **6.1** ([4] Thm2.7)

X :: scheme over  $\mathbb{C}$ , F :: coherent sheaf on X とする. この時, F の first order deformation とは,  $\mathcal{F}$  :: coherent sheaf on  $\mathcal{X} = X \times_{\mathbb{C}} D$  と homomorphism ::  $\phi : F \to \mathcal{F}$  の組であって誘導される射  $\phi \otimes_D 1_{\mathbb{C}} : \mathcal{F} \otimes \mathbb{C} \to F$  が同型であるものとする.

この時、first order deformation of F over  $\mathcal X$  の同型類と  $\operatorname{Ext}^1_{\mathcal O_X}(F,F)$  の元とが、一対一対応する.

## 系 **6.2** ([4] Prop2.6)

上の定理で F を invertible sheaf に限定すると、first order deformation of F over  $\mathcal{X}=X\times D$  の同型類は  $H^1(X,\mathcal{O}_X)$  の元と一対一対応する.

(証明). 系 (5.15) の証明と全く同様.

#### 定理 6.3

X,Y: fiexed scheme,  $f:X\to Y$  をとる. この時, first order deformation of a map f with both X and Y fixed の同型類と,  $H^0(X,f^*\mathcal{T}_Y)$  の元とが一対一対応する.

こちらについては詳しい文献が見つかっていない. しかし, "Deformation of a map  $f: X \to Y$  with only Y fixed"については, 解析的な場合について [1] §8 で述べられている.

## 7 Functor of Artin Rings - Abstruct Deformation Theory

3 つの圏を次のように定める. L:: local noetherian  $\mathbb{C}$ -algebras with residue field  $\mathbb{C}$  とする.

 $(LA)_L$ : the category of local artinian L-algebras with residue field  $\mathbb{C}$ .

 $(CLN)_L$ : the category of complete local noetherian L-algebras with residue field  $\mathbb{C}$ .

 $(LN)_L$ : the category of local noetherian L-algebras with residue field  $\mathbb{C}$ .

 $L = \mathbb{C}$  の時は添字を略す. (ref. [8] p.1)

 $(LA)_L \subset (CLN)_L \subset (LN)_L$  という包含関係があることに注意.

## 定義 7.1 ([8] §2.2)

以下のような functor を functor of artin rings と呼ぶ.

$$F: (LA)_L \to (Sets).$$

ここで  $L \in (CLN)$ .

 $F(\mathbb{C})$  が 1 元集合 (singleton) ならば、F は特に predeformation functor と呼ばれる.

F が functor

$$\operatorname{Hom}_{(\operatorname{CLN})_{r}}(R,-) \qquad R \in (\operatorname{CLN})_{L}$$

と同型である時, F:: prorepresentable と言う.

### 定義 7.2 ([8] §2.2)

formal element semiuniversal formal element universal formal element

predeformation functor :: F が (semi)universal formal element を持つか、ということについては、以下の定理が大変有用である。逆に以下の定理が predeformation functor を考える重要性を示している。

## 参考文献

- [1] Enrico Arbarello, Maurizio Cornalba, and Phillip Griffiths. Geometry of Algebraic Curves: Volume II with a contribution by Joseph Daniel Harris (Grundlehren der mathematischen Wissenschaften). Springer, 2011 edition, 4 2011.
- [2] William Fulton. Intersection Theory. Springer, 2nd ed. 1998 edition, 7 1998.
- [3] Robin Hartshorne. Algebraic Geometry (Graduate Texts in Mathematics. 52). Springer, 1st ed. 1977. corr. 8th printing 1997 edition, 4 1997.
- [4] Robin Hartshorne. Deformation Theory (Graduate Texts in Mathematics). Springer, 2010 edition, 12 2009.
- [5] Ian Morrison Joe Harris. Moduli of Curves (Graduate Texts in Mathematics). Springer, 1998 edition, 8 1998.
- [6] Hideyuki Matsumura. Commutative Ring Theory (Cambridge Studies in Advanced Mathematics). Cambridge University Press, revised edition, 5 1989.
- [7] David Mumford Pierre Deligne. The irreducibility of the space of curves of given genus. *Publications Mathématiques de l'Institut des Hautes Études Scientifiques*, Vol. 36, No. 1, pp. 75–109, Jan 1969.
- [8] Edoardo Sernesi. Deformations of Algebraic Schemes (Grundlehren der mathematischen Wissenschaften). Springer, 11 2010.
- [9] Angelo Vistoli. The deformation theory of local complete intersections. https://arxiv.org/abs/alg-geom/9703008.
- [10] 志甫淳. 層とホモロジー代数 (共立講座 数学の魅力). 共立出版, 1 2016.